

我らの内なるファリサイ主義

ギリシャ人は自分たちこそ文明人であり、自分たち以外の民族はみな未開人（バルバロイ、野蛮人の意）であるとして軽蔑したというが、それと同じように、ユダヤ人は、自分たちこそ、神の聖なる律法を与えられ、神の契約の担い手とされ、またその印としての割礼を身に受けた者、すなわち神の選民であって、他の民族はみな神の恵みに値しない、宗教的に汚れた存在であるとして自分たち以外のものを「律法なき民」「無割礼の者」「異邦人」と呼んでさげすみ、さばいた。

使徒パウロは、ローマの信徒への手紙第 2 章で、このユダヤ人の宗教的偏見と特権意識を断罪する。すなわち、神の前にさばきを受けねばならないのは異邦人だけではない。選民を自認するユダヤ人もまた、神の前には同罪である。彼らもまた、もし悔い改めないならば、神のさばきの下にあるのであって、ユダヤ人だから神はその罪を見過ごし、異邦人だからさばかれるということはある得ない。神の前にはユダヤ人、異邦人の区別はない。すべてがその罪を赦されねばならない存在（罪人）であり、ただ心から罪を悔い改め熱心に神を求める者にこそ、罪の贖いと赦しの恵みが与えられ、永遠の生命が与えられるのである、と（1～11 節）。

ユダヤ人の誤った選民意識は内側には特権意識を生み、外に対しては差別と偏見、軽蔑と敵対意識を生み出した。これはしばしばファリサイ主義と呼ばれる。ファリサイ主義は、まず第 1 に、人をさばく精神である。自分を特権者の位置に置き、自分のことは棚にあげて、人をさばいていく。第 2 に、それは自己義認の精神である。他人をさばくことによって、自分は正しいが他人はそうではない、優越感、自己義認が伴う。

ファリサイ主義は第 3 に、人の欠点や失敗や古傷を見付け、それをさばくことによって自己満足する。或る人がこう言っている、「人間がだれに一度も学んだことがなくても身に着けている技術は人をさばくことである。賢明な者は賢明な者なりに、無知な者は無知な者なりにそのことを知っている。しかもそのように、自由に、自然に身に着けているものであるから、これを行なう方法もまたさらに巧妙をきわめるものである。・・・

「ファリサイ主義は、しばしば正義の名の下に、人の過ちや失敗をさばき人を傷つけて相手を容赦することがない。そして、自分は正しいことをしているのだと自分に言い聞かせて満足する。相手の中に過ちや失敗を見ると喜び、それを見つけないと、ますます意地悪くあら捜しをし始める」と。

さらに第 4 に、ファリサイ主義は偏見によって固められる。いったんそう思い込んだら、事情を理解しようとせず、許そうともしない。「ダメだ！これ以上聞きたくない」と言う。どんな説明もはねつけ、弁明や理由に耳を貸そうとしない。以上がファリサイ主義の特徴である。

ところで、そのようなファリサイ主義は、ある特定の人々だけでなく、私たちすべての者が陥り易い罪、したがって、私たち自身よくよく注意しなければならない罪であることを忘れてはならない。「人を裁くな。あなたがたも裁かれないようにするためである。あなたがたは、自分の裁く裁きで裁かれ、自分の量る秤で量り与えられる」と言われた主イエスの言葉に、私たちも常に謙遜に耳を傾ける者になりたいと思う（マタイ 7：1～2）。